

バリ島で見た信仰の諸相 —供物チャナンと神座パドマサナー—

名古屋市立大学大学院人間文化研究科研究員 市岡 聡

一・バリ島の信仰

バリ島は、島民の九〇%以上がバリ・ヒンドゥー教徒であり^①、バリ島独自に発展したヒンドゥー教への信仰が盛んな島である。バリ・ヒンドゥー教の特徴の一つは、神の姿が造形されない点にある。これはバリ島の土着信仰と習合して発展していったためであるという（立川二〇一四）。バリ・ヒンドゥーのもう一つの特徴は、サン・ヒャン・ウィディ（Sang Hyang Widhi）という神の存在が挙げられる。この神は、ブラフマー・ビシヌヌ・シヴァのヒンドゥー三神よりも上位にある唯一神であり、インドネシアの国是「パンチャシラ（Pancasila）」の第一原則、唯一神への信仰という思想への対応のために創出されたものといわれている。他方、バリ島には多くの神々がいる。それは、寺院だけでなく、山や樹木、道端や川や泉などにも存在しているという（賈二〇〇九）。また、亡くなっ

た先祖が神として敷地内に祀られている。

このようにあらゆる場所に遍満する神々に対し、バリ島民は毎日欠かすことなく供物を捧げ、それを絶やすことはない。「バリにおける儀礼とは詰まるところ供物の献納である」（中村一九九四）と言われる。日本でも路傍のお地藏様や小さな祠に花が供えられているのを見るが、バリ島のように多くの人々があらゆる場所で毎日供えるという姿ではない。本報告では、バリ島において重要な位置を占める供物、そして供物が捧げられる場としての神が降臨する石の座について紹介したい。

二・供物 —チャナンとチャル—

①バリ島で見た供物

バリ島内を散策すると、家の入口や道端に祭壇のようなものがあることに気付く。それは、装飾された木製の台、竹を籠状に編んだもの、日



【写真3】 灯籠状のものと椅子状のもの



【写真2】 竹を編んだもの



【写真1】 木製の台

本の灯籠のような形をしたものや椅子のような形をしたものなど、多種多様である【写真1〜3】。この様々な形の祭壇には、必ず真新しい供物が供えられている。その供物は、椰子のような植物の葉で作られた容器の中に花びらを入れたものが多いが【写真4】、なかには米や玉子、果実などを入れたものや、火のついた線香が横たえられているものもあった。



【写真4】 供物

別の場所では、同様の供物が地面に直接置かれていた。あるものは新しく綺麗な状態だったが、あるものは人や車に踏みしだかれてゴミと化していた【写真5、6】。ティルト・ウンプル寺院 (Pura Tirta Empul) の門前にある土産物屋街では、商店の前の歩道上に供物が置いてあることが多く、うっかりすると蹴飛ばしたり、踏んづけそうになってしまったり、祭壇の上に置かれた供物と地面に



【写真5】 地面に置かれた供物



【写真6】 ゴミと化した供物

置いてある供物は、置いてある場所こそ違うが、見た目は同じであることから、いずれも神様に供えたものであるということが推測できた。しかし、地面の上に置かれ、ゴミのようになっていたものをどう理解すればいいのだろうか。現地ガイドに訊いてみると、店の前に置かれた供物はその日の商売に問題がないよう、毎朝供えていて、供えてしまったら、

あとはゴミと同じ扱いになるらしく、蹴飛ばしても踏んづけけても問題ないとのことだった。このような発想の背景には、神々等は供物の精髓のみを食べるという考え方がありと思われる(中村一九九四)。この考え方に従えば、捧げる前の供物は神様が食べるので大切だが、捧げ終ると神様が食べた後になるため、踏んでも蹴っても問題ないということになるのだろう。

② 供物を何と呼ぶか

供物は、祭壇等の台上にある場合は「チャナン」(Canang) または「バンテン」(Banten) と呼ばれ、「デワ」(Dewa) と呼ばれる天界の神々や祖霊神に捧げられる供物である(吉田P一三、クタP二二三)。地面にある場合は「チャル」(Caru) と呼ばれ、下界の悪霊「ブタ・カラ」(Butah kala) に捧げられる供物である(吉田一九九二)。

チャナンとバンテンの違いは、供物の種類による。チャナンは椰子の葉や花などの供物を指し、バンテンは果物、肉、菓子とチャナンをあわせた物であるという(クタ一九九八)⁽²⁾。チャナンに一般的に使われる花は、アジサイ、ホウセンカ、マリゴールドなど日本でも見られるものや、南方に生育する香りの強い花などが盛られる。また、「パンダナ

ス」(Pandanus Harum) という多年草の葉の細切りが利用される(新妻二〇〇七)。私が見たチャナンにもパンダナスと思われる葉の細切りが盛られていたのを多く見ることができた【写真4の中心にある線状のもの】。なお、【写真7】は、私が見た唯一の動物を使った供物で、鳥を丸



【写真7】籠の中央に焼いた鳥が見える
(ティルタ・ウンブル寺院にて)

焼きにしたものが供えられていた。チャルには生の鶏の頭と皮、生の牛や水牛の首、焼いたご飯などを盛るといふ(吉田一九九二)が、私が見た地面に置かれた供物にはこのような生々しいものは載っておらず、内容はチャナンとそれほど変わりないものだった。供物の内容からは、私が見た地面に置かれていた供物がチャルなのかはわからない。しかし、チャナンは必ず祭壇など上の方に置かれ、チャルは必ず地面に置かれるというから(吉田一九九二、賈二〇

〇九)、私が見たものはチャルの一種だったのであろう。ティルタ・ウンブル寺院の土産物屋の例は、商売を悪霊に邪魔されないようにブタ・カラに供物を捧げたと解釈することもできよう。

三・神座 —パドマサナー—

バリ・ヒンドゥー教には神の造形がない。今回、バリ・ヒンドゥー寺院をいくつか訪問したが、拝む対象としての像や絵画は極めて少ないという印象を持った。そのかわりに、神が降臨するための石の座が作られ、普段は天界や山上にいる神々は、祭日になると寺院にある石の座に降臨するといふ(吉田一九九二、賈二〇〇九)。

宿泊したホテルの玄関前の片隅には、何らかの宗教的な施設だろうと直感できるレンガ造りの建造物があつた【写真8】。基壇部分は亀のような動物^③、その上に竜のような造形、さらにその上には装飾的な模様があり、一番上は椅子のような形をしていた。基壇部分の亀は「バダワン」(Badawang) と呼ばれる世界を支える亀で、竜は「ナーガ」(Naga) と呼ばれる神話上の蛇であらう。

この建造物について、現地ガイド



【写真8】ホテル敷地内にあつた建造物



【写真9】タナ・ロット寺院
(Pura Tanah Lot) のパドマサナー

に訊くと、「ファドゥマサナー」という名前を覚えてくれたが、これは「パドマサナー」(Padmasana) と呼ばれるバリ・ヒンドゥー教の宗教施設で、「蓮華座 (Lotus-seat)、太陽神スリヤの姿をとったシワ神のための石造りの祭壇」(用語解説・索引一九九四) のことであらう。つまり、「神座」であり、寺院にある場合、ここはサン・ヒャン・ウィディを祀る場になるといふ(嘉原一九九四)。今回訪問した寺院にもパドマサナーの存在は確認できたが【写真9】、

それ以上に気になるのは、街の至る所に椅子の形をしたパドマサナが存在することであった【写真3、10、11】。街で見ることができるとパドマサナは、石造、レンガ造、セメント造と様々な材質が用いられており、高さは大人が椅子の上にチャナンを置くことができる程度の高さのものが多く見受けられた。



【写真10】 街にあったパドマサナ



【写真11】 ホテル近くにあったパドマサナ

また、日本の灯籠のような形をしたものもあった【写真3左側】。バリ島民がこれを何と呼んでいるのかはわからなかったが、灯籠という火袋の部分にチャナンが捧げられており【写真12】、神様を祀る施設であることは確かだろう。



【写真12】 灯籠型の火袋内にチャナンが供えられている。



【写真13】 タマン・アユン寺院の門にいる花を飾り付けた神

今回は街において、チャナンやチャルを供える姿を見ることができなかったが、ホテル前のパドマサナで男性が供物を捧げるところを見ることができた。彼は、花びらを盛った供物をパドマサナの前に設えられた台の上に置き、線香を手向け、祈りを捧げていった。ほんの数秒の祈りであったが、パドマサナへの生きた信仰を見ることができ

た。祈りを終えた彼は、去り際に供物の花びら一片を右耳の上に乗せていった。タマン・アユン寺院 (Pura Taman Ayun) で門の神様の耳に花を飾っている光景を見たが【写真13】、耳の上に花を飾るといいう行為の意味するところまではわからなかった。

おわりに

私は古代日本の仏教史を研究しているため、本稿の最後では日本とバリ島の共通点について考えてみたい。平安時代中期、比叡山横川にあった靈山院という堂舎では、本尊の釈迦如来像が生きているものとして供養する「釈迦生身供」という法会が毎日営まれていた。この法会においては、釈迦像に対し朝昼に食事や果物を供え、暗くなったら灯明を灯し、寒ければ火鉢で堂内を温め、暑ければ釈迦像を扇で煽ぐという供養が行われていた。このような生身供は現代の日本にも生きている。たとえば延暦寺浄土院では最澄のために、高野山奥の院では空海のために、今日においても毎日食事が供されている。霊山院や延暦寺浄土院、高野山奥の院で行われている供養は、供養の対象となる人格への強い畏敬の念が長い間続いてきたため、現在にも伝

わるものとなったのだろう。これはバリ島でも同じことが言える。バリ島民は、島に遍満する神々や祖先霊を綿綿と強く畏敬し続け、代々、チャナンを供養するという行為を続けてきたのである。

日本とバリ島との間には文化・習俗の違いがある。しかし、バリ島のいたる所に神々が存するという考え方は、日本の八百万の神々と似た発想といえる。国民性の違いを鑑みることも大切であるが、他方で供物や八百万の神々という共通点を視座として、バリ島の文化や習俗を見ることで、バリ島という遠く離れた島をより深く理解できるようにするのはないだろうか。

〔註〕

(1) バリ人の九三・一八%がヒンドゥー教徒で、地域によっては九九%以上がヒンドゥー教徒という県もあるという(嘉原優子「バリ島の概観」(「神々の島バリーバリ・ヒンドゥーの儀礼と芸能」春秋社、一九九四年)

(2) 本報告では台上に置かれる供物の名称を「チャナン」で統一したい。

(3) 写真ではパドマサナの前にある机が邪魔をして「バダワン」の造形は見えない。

〔参考文献〕

- ・ 賈鍾壽『バリ島「Island of Gods」』大
学教育出版、二〇〇九年
- ・ 立川武蔵『宗教の世界史Ⅱ ヒンドゥー
教の歴史』山川出版社、二〇一四年
- ・ 吉田禎吾『バリ島民―祭りと花のコスモ
ロジー―』弘文堂、一九九二年
- ・ 中村潔『バリの儀礼と共同体』(吉田
禎吾監修『神々の島バリーバリ・ヒ
ンドゥーの儀礼と芸能』春秋社、一九
九四年)
- ・ クタ・アルダナ、鈴木理伊『クタ・アル
ダナのバリ語会話』めこん、一九九八
年
- ・ 新妻昭夫『バリ・ヒンズー文化の供花に
関する調査報告』(「恵泉女学園大学園芸
文化研究所報告・園芸文化」二〇〇七年)
- ・ 「用語解説・索引」(「神々の島バリーバリ・
ヒンドゥーの儀礼と芸能」春秋社、一
九九四年)
- ・ 嘉原優子「バリ島の概観」(「神々の島
バリーバリ・ヒンドゥーの儀礼と芸能」
春秋社、一九九四年)